

2018年12月
1151号

百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

自分自身の心、言葉で人に話せるようになろう

～FAWA まで約2年・12月櫻華塾～

本格的な冬を迎え、寒さも日ごと厳しくなってきた12月16日、櫻華塾を開催いたしました。冒頭、小山副会長が「よりいっそう団結していきましょう」と声をかけられ、佐藤玉美一冊の会広報親善大使の指揮のもと全員でベートーベンの第九「歓喜の歌」を合唱。1年を締めくくりました。

また、なんと先日赤松良子先生からお電話を頂き「みんなによろしく、来年もよろしく」とおっしゃられたとのこと！いかに私たちの成長を期待され、再会することを楽しみにしてくださっていることか、そのお気持ちを受け『忘れられぬ人々』1000人輪読はもちろんもこと活動に励む決意をいたしました。

そして櫻華塾前日の12月15日、尾崎行雄先生のお墓参りをしていたとのこと。大阪の河野さん、ト部さんが東京に出て来ると連絡を受け、急遽、大槻会長、小山副会長と共に、山内さんが車を運転して鎌倉まで行かれたそうで、若手の3人から報告と感想の発表がありました。



尾崎行雄先生のお墓参りに同行させて頂いて

尾崎先生のお墓は円覚寺の中に所在しております。円覚寺は臨済宗円覚寺派の大本山で、開基は北条時宗、無学祖元により開山されました。鎌倉幕府の8代執権 北条時宗が、「元寇で亡くなった戦没者を敵や味方の区別なく、平等に弔おう。」という思いで中国僧の無学祖元を招いて創建したと言われていいます。

その広い境内の中、坂道と階段を15分ほど歩き続けたところにある、黄梅院という最奥で最も標高の高いところに尾崎先生のお墓は位置しています。土地の隆起を利用して建立しているため四方美しい山々に囲まれており、歩き進める程に日常から離れ心が清められるような空間でした。岩肌をくり抜いたようなお墓でとても気品があり、静けさの中に壮大な雰囲気を感じました。お墓からは、円覚寺の風景が大変美しく見渡せました。黄梅院には、先生の他にも日本のために命をかけて生きた方々がたくさん眠っておられます。

尾崎先生が生涯をかけて世の中に説いてこられた、人々の平等・平和を実現する民主政治の根底となる、“個人がどうあるべきか”という問いは不変であり、今こそ日本人々に、そして世界に求められる不変の思想であるとひしひしと心に染み入り感じました。墓前で手を合わせてご挨拶をさせて頂きながら、大切なことを見失ってはいないか、心の中で自らを深く問いました。

大槻会長、小山副会長が大変寒い中坂道を歩き、階段を登り尾崎先生の墓前に手を合わせられる姿、そしてその場所に同行をさせて頂き、大変貴重な経験をさせて頂いたことに心より感謝を申し上げます。人から人へのみ、思いは伝わるものなのだと改めて感じたと同時に、自分も周りの方々に思いを伝えていく行動を起こしていきます。

FAWA(アジア太平洋女性連盟)まで約2年、何をするか

大槻会長から、日本でのFAWA開催までおよそ2年だが、そのために何か行動をしましたか？と鋭い問いがありました。周りの人にFAWAの説明をするために何か資料が欲しいという声もあるが、資料が必要なら「私は何を手伝えればよいですか？」と参画の姿勢を持つ人とそうでない人がいる、と。開催期間中、延べ800人程の人

数が必要だと推定されるとのことで、まだ2年あるなどと油断していた私は大いに反省いたしました。

会長が「1国2団体有識者」という決まりであったFAWAを、誰でも参加できるようにしたい」という思いを相馬雪香先生に伝えた時「あなたが変わえなさい」と言われたそうです。そして、実際変わりました。しかし、初めて参加した会場で「私の父は日本にやられた」と言われたフィリピンの方もいらしたそうで、納得してもらうには誠実さをみせるしかないと思われたと。今は各国の代表者と良好な関係を築いていらっしゃいますが「やっとここまでできた」と会長はおっしゃいました。その思いを受け継ぎ決して後退しないよう、我々は心して取りかからなければならないと決意いたしました。

石田理事長から

尾崎行雄のお墓参りをして頂いたこと、ありがたく思います。何をしにお墓参りに行くか、色々な方がいます。親族、研究している人……。我々一冊の会は尾崎行雄と相馬雪香を大切に思っています。大切なのはお墓の前で何を思うか。自分自身に向き合い、自分自身がどういう国や社会を目指すのかを思うのと思わないのでは全く違います。これはどこでも出来る事で、もちろんお墓に行かなくてもいいと私は思います。

心の持ちようという点はFAWAも一緒です。以前から、私はFAWAについて30秒でもいいので自分の言葉で語れるようにして欲しいと言ってきました。案内の紙はあった方がもちろんいいですが、それは道具であって伝えるのは自分自身です。常日頃アジア太平洋地域の連帯について考えていないと言葉にならないでしょう。FAWAは会議の4日間が成功するためにあるのではなく、女性の地位向上、自身の成長と研鑽、女性の暴力撤廃等を目指しているのです。相馬雪香の意思を引き継ぐ取り組みだと思しますので、自分自身の心、言葉で人に話せるところまで高めていってください。そのプロセスを自分自身に結びつけて考え、1人1人が自覚した上でこれからの準備をしていきましょう。

一冊の会は54年目に入りました。識字教育や被災地の支援をしながら若い方へのエンパワーメントもしています。これは大変大事なことです。活動をすることが自分自身の成長につながっていくことで、よい循環ができ今日までやってきたのだと思います。「人生の本舞台は常に将来に在り」は、尾崎行雄が74歳で死にかけて時の言葉ですが、大事なことは、なぜそれだけ前向きな言葉が生まれたのかということです。若いときから社会と向き合い、日本がどうあるべきかを考えていたから出た言葉ではないでしょうか。我々はこの生き方を知っておかないといけません。ただ単に前向きな言葉ですね、というだけでは駄目です。1人でも大きく成長し、周りに伝えて行くことができるよう、今日から頑張りましょう。

おわりに

最後に、初めて参加した相馬さんが「ありがとうございました。会長のパワフルな言葉が胸に響きます。私は雪香先生とは血のつながりはありませんが、魂のご縁というものはあると感じています。皆様が尾崎行雄先生の思いを受け継がれていることに感動しました。」と今日の感想を発表しました。

そして小山副会長が「世界は30代といった若い人が中心になっており、日本でも復興の推進は若い人が活躍している。脳は使えば使うほど若返るというので、頑張りましょう！」と全員に激励されました。また、陸前高田に整備される平和公園に、復興祈念樹の雪香プロスパーポローニアを2020年の4月～5月頃に植える予定となった報告がありました。公園の設計のなかに組み入れられるとのこと。「木というのは、この木はダメだと思うとダメになります。必ず私たちがやっていることはどこかで相手にも通じます。どうやって復興から再起して1人残すこと無く幸せにするか、このことも皆さん一緒に考え実践して成功させていきましょう。」と今年最後の櫻華塾を締めくくられました。

これから年末、それも平成最後の年末を迎えます。来年は改元を迎え新たな時代に気持ちも踊るかもしれませんが、一冊の会の精神、相馬先生の精神は変わりません。昭和、平成、そして新たな時代へと、私たちが受け継いでいかなければならない、そう改めて決意いたしました。



文責：平間研究員、赤田研究員、河野訓子